

日本留学時期の李大釗——年譜的考察——

川 尻 文 彦

本稿では留日時期の李大釗（一八八九—一九二七）の事績について年譜的に考察を加える。李大釗は一九一四年一月から一九一六年五月まで二年半弱、日本に滞在していた。史料の不足から李大釗の日本での生活については不明な点が多く、今後のさらなる調査が必要である。そのための基礎作業として李大釗の日本での生活について現時点でどこまで分かっているのかを確認しておきたい。一九一六年に中国に帰国した後の李大釗は、言論界で活躍し、新文化運動に参加し、その後ロシア革命の影響を受け止め、マルクス主義者として中国共産党の成立を主導した。日本留学はそれらの華々しい李大釗の活躍の「前史」と見なされるため、どの研究書・研究論文においても日本留学時期に対する言及はあることはある。しかし、その内容は大同小異で、「通り一遍」である。それはごく少数の日本人研究者の研究成果から得られる情報をなぞっただけであるからである。李大釗の日本留学時期における知的営みがどのようなものであったのかを知る手掛かりになっていないばかりか、日本留学が李大釗のその後の思想にどのような影響を与えていったのか、といった問題関心は乏しいように思われる。そこでまず本稿では初歩的な作業として情報の交通整理を試みる。

中国では李大釗は中国共産党創立（一九二二年）にかかわる重要人物の一人として重視されているため、彼についての詳細で正確な年譜が編集されている。とりわけ一九一六年の中国に帰国以降から中国共産党の立ち上げと始動

(そしてその非業の死)に至るまでの史実関係の整理は圧倒的なものがある。しかし、やはり日本留学時期の記述は手薄であり、新たな事実関係の発掘はない。本稿はそれらの『年譜』の成果を参考にしつつも、これらの『年譜』において不足している内容について、日本人学者の立場から事実関係について補強することを狙いとしている。そのことによって日本と中国の学界において情報の共有をはかり、今後の李大釗研究の発展のための土台とすることを目的とする。そのため学術論文としては異例の形式ながら年代にそって(chronological)年譜的な叙述をとることにした。本稿は、日本留学を準備した北洋法政専門学堂の時期から日本留学を終えて中国に帰国する一九一六年までを主な対象にする。日本留学に関する事実関係の確認に加え、それに止まらず、李大釗における日本との思想的な連鎖にかかわる部分に着目し、思想的な分析を加えることにする。

一八八九年十月二十九日(光緒十五年十月初六日)

河北省楽亭県大黒坨村に生まれる。

一九〇七年(光緒三十三年)八月中旬

天津の北洋法政専門学堂の入学試験に臨む。合格後、八月十八日に入学式に出席した。九月二日に学生生活が始まった。

北洋法政専門学堂は光緒三十三年(一九〇七年)に袁世凱によって創立された六年制(予科三年、本科三年)の法律・政治両科を有する学校で、日本の法律学校にならない、本科では日本語が必修であったとされる。

李大釗は後年に「十八年来之回顧——在直隸法政専門学校十八周年校慶会上的演講」(一九二二年)で「当時二人の日本教員がいて、一人は吉野作造、一人は今井嘉幸で、本校で教授となった。後に二人は帰国しともに力を尽くして平民主義を鼓吹し、民治思想を紹介し、民権運動を行い、彼らの国民を教え導いたので、日本国民は大いに彼らの

恩沢を受けた。」と述べた。李大釗と親交のあった清水安三は『支那当代新人物』（一九二四年）で李大釗を取り上げ、「北洋専門学校で六年間、勉強したのである。今井嘉幸、吉野作造は、彼の先生である。わけて今井嘉幸からは、直に教はり、天津時代の吉野作造からは講演に依つて、学んだそうである。」と述べる。⁴

吉野作造（一八七八〜一九三三）は創立当初の一九〇七年はじめから一九〇九年末まで、今井嘉幸（一八七八〜一九五二）は吉野より一年半遅れて一九〇八年から一九一三年まで教習として滞在した。この両者は東京帝国大学での同級である。李大釗は吉野作造とは授業での接点はなかったようだが、今井嘉幸の授業は受講しており、来日直後に今井を訪ねたり、今井の著書を中国語訳するなど交流は続いた。

受講した授業

受講テキストが残っている二例を挙げる。一九〇九年九月〜一九一〇年六月（予科第三学年）に『法学通論』（別名『預科法学通論講義』）を、一九一〇年九月〜一九一一年六月（正科第一学年）に『刑法講義』（別名『正科刑法講義』『刑法総則』）を受講した。李大釗の書き込みが入ったテキストが保存されている。⁵テキストの原文は日本語である。武藤秀太郎によれば、この李大釗の手沢本である『法学通論』は明治法律学校（現、明治大学）の創設者岸本辰雄（一八五一〜一九二二）の『法学通論』（明治大学出版部、一九〇七年）に全面的に依拠したものである。講義者は今井嘉幸である可能性が高い。⁶

一九一二年秋 北洋法政学会が設立される

北洋法政学会が北洋法政専門学堂の第一期生（一九〇七年入学、予科三年、本科三年、一九一三年六月卒業）を中心に設立される。李大釗は一年目より入会し、編集部の部長を郁巍とともに担当した。北洋法政学会成立時には今井嘉幸、大石定吉がカンパをしていることでも知られる。

北洋法政学会は一九一二年十二月に『中国分割之運命』駁議』を刊行する。『中国分割の運命』は中島端によって一九一二年十月に東京で政教社から出版された。その二か月後には中国語訳され駁議が付され出版されたことになる。本書に対する関心の高さがうかがい知れる。⁷⁾『中国分割之運命』駁議』の訳序や駁議を李大釗の筆によるものとする見解もあったが、それを裏付ける証拠はない。

一九一三年四月一日に北洋法政学会の機関誌『言治』が刊行される。創刊号に「日」中里弥之助「托爾斯泰主義之綱領」(李釗「李大釗の筆名の一つ」訳)が掲載される。「訳者」[李大釗]「附志」に「日人中里弥之助氏は『托翁言行録』を著し、托翁の学説の結晶をまとめ上げ、この篇を為した。これを読んで托翁の精神を体得すべきである。ここに急いで翻訳し、当世に供するものである。」⁸⁾とある。中里弥之助とは長らく不明であったが、中里介山(一八八五〜一九四四、小説家、『大菩薩峠』の著者)のことで、『托翁言行録』とは中里介山『トルストイ言行録』(内外出版協会企画、一九〇六年)の増補再版(同年一九〇六年)に付された「トルストイズム綱領」を李大釗は翻訳した。⁹⁾李大釗はこの増補再版の奥付に出ている本名(中里弥之助)を記したとみられる。中里介山を介した李大釗のトルストイ理解については一個の研究課題であるが、さしあたり李大釗においてトルストイを通じて革命とは悔い改めであると理解したとすることができるとある。李大釗自身が日本で執筆した「民彝与政治」(一九一六年)の中で、トルストイにおける革命を解説して次のように言っている。「革命とは人類共通の思想や感情が真に覚醒する時に際会し、一念発起して旧悪を去って新善につかんとする心の変化が外部に発現することである。悔い改めの一語以外に、革命の意義をあらわしうる言葉はない。」¹⁰⁾とある。この部分は上述の「托爾斯泰主義之綱領」の「革命之真意義」において述べられている内容と同一である。

一九一二年冬 中国社会党に加入したかどうかは不明である

中国社会党は社会主義を提唱する江亢虎により一九一一年十一月五日に組織され、上海に本部を置いて、党勢拡大

につとめ、十三年五月頃には支部四百以上、黨員数五十万余の規模に至ったという。^①李大釗と中国社会党（天津支部も存在した）との関係については、李大釗がたしかに入党したという証拠は発見されていない。

一九一三年六月 北洋法政専門学校を卒業する

予科三年、本科三年の計六年間の課程を終えて北洋法政専門学校（一九〇九年に北洋法政専門学堂から改称）を卒業。

日本留学を決意する

李大釗が日本留学を決意した理由について、一九一四年九月一日に出版された『言治』月刊第四期に掲載された李大釗の友人郁巍の「李亀年遊学日本序」の記述が参考になる。李亀年とは李大釗の別名。そこには「彼「李大釗」は自分の蓄積が欠けており、不足していると考え、日本に留学して社会経済学を修め、民生が衰えている原因を研究しようとした。」^②とある。

湯化龍の援助

湯化龍と孫洪伊は李大釗を高く評価しており、日本留学に当たって資金援助を行った。日本滞在中、李大釗が湯化龍の娘らの面倒をみていたことが、湯化龍の娘湯佩松の回想で一九八七年に明らかになった。「私たちによい教育を受けさせるために、一九一四年の後半、私の父湯化龍は私と私の姉を東京の学校に送った。当時私はわずか十二歳だった。父の言いつけに従い、私はすでに東京にいた李大釗を訪ねに行った。父はすでに私の面倒をみるよう李大釗に言いつけてあった。李大釗が日本に留学できたのは私の父の援助があったからだと言言できる。私が東京に着いた後、いつも李大釗を訪ね、また毎週土曜日の午後には中華基督教青年会館に英語を習いにいった。この日はいつも李

大剣はグラウンドで私を待っているので、遠くから彼を見ることができた。私が彼を訪ねる度に、私の勉強の進み具合をたずね、私が不勉強だったりすると私に対して厳しく激励をしたものだった。¹³⁾

一九一四年一月 日本に渡る

渡日時期について研究者が根拠としているのは、李大剣「物価与貨幣購買力」(一九一四年八月、『甲寅』第一巻第三号)の「残冬風雪、廻従二三朋輩、東渡瀛島」の記述である。文中に残雪とあるので、一九一三年末ではなく、一、二月頃と推定される。「二三朋輩」(二、三の友人)とは李培潘(凝修)(一八八七?)、張潤之(沢民)(一八八九?)のことで、¹⁴⁾早稲田大学の学籍簿にその名がみえる。李培潘と張潤之の二人は李大剣と北洋法政専門学堂の同学であり、同じく北洋法政学会の会員であった。李大剣に同行し、同じ宿舍に入った。

日本での住処

李大剣の日本での住処について整理しておく。李大剣は基督教青年会に住んでいたとされ、それは東京神田にあった基督教青年会とされていた。しかし、李大剣の学籍簿が森正夫によって早稲田大学で発見され、現住所として「牛込区下戸塚町五二〇基督教青年会内」との記述があった。この住所は神田ではなく、早稲田大学にほど近い別のものである。基督教青年会についてはさねとうけいしゅうの調査によれば、一九〇六年春に神田の日本青年会館のなかに華人青年会が作られた。これがのちの中華留日基督教青年会であった。この会では英語を教えるということで盛んに学生を集め、一九〇七年には早稲田分会が生まれ、一九一〇年に北神保町に本部を建てて日本青年会館から独立し、これがのちの留日学生の根拠地になった。¹⁵⁾ここでいう早稲田分会が、李大剣のいう「牛込区下戸塚町五二〇基督教青年会内」にあたる。今日早稲田大学戸山キャンパス(文学部)の向かいにある早稲田奉仕園(アバコプライダルホール)のあたりだと推定される。早稲田大学に李大剣と一緒に留学し同宿舍に住んだ李墨卿が『墨園隨筆』(一九三二

年)の中で、北に向かつて五百メートルほど行けば早稲田大学に着く、と記しているのは、地理的な事実⁽¹⁶⁾に符合する。

アメリカのパプテスト派の宣教師H・B・ベニンホフが一九〇七年に来日し、牛込区左内町の同派の教会、東京学院で伝道にあたるとともに、早稲田大学の講師にも任用された⁽¹⁷⁾。ベニンホフは築地の自宅で聖書や英語を教えていたが、早稲田の学生のための恒常的な教育施設を望んでいた大隈重信や基督教青年会の学生の世話をしていた安部磯雄らの要望もあって学生の寄宿舎を作ることになった。早稲田鶴巻町にあった東京基督教青年会の寮を譲り受け、一九〇八年十一月、友愛学舎を開設した。この友愛学舎は一九一一年十月に牛込区弁天町九一番地に移り、木造三階建ての立派な学生寮となった。その後、一九一六年八月に李大釗が住んでいた下戸塚の宿舎は廃止となり、それを友愛学舎が引き継いで信愛学舎となった⁽¹⁸⁾。この信愛学舎を拠点にして早稲田奉仕園(一九一一年、早稲田奉仕園の初代理事長は安部磯雄である)やスコットホールが建設され、今日に至っている。中国と日本の基督教青年会が人的にも互いに密接な関係にあったことは間違いない。しかし、中華留日基督教青年会と信愛学舎(や早稲田奉仕園)とは別組織ではあるので念のため確認しておく。

一九一四年春～夏 中華基督教青年会館内で英語を学ぶ

基督教青年会で英語を習った。李大釗が英語教師のA・ロビンソン(Arthur G. Robinson)に課題提出した英文による自伝My Autobiographyが残っている。生まれてから日本留学までを記しているが、英語授業内の課題らしく一頁ほどの短文である。米国の研究者M・メイスナー(Maurice Meisner)がA・ロビンソンに直接インタビューをし、発掘した。A・ロビンソンによれば、李大釗は英語のクラスだけではなくバイブル・クラスにも出ていたようである⁽¹⁹⁾。ただし李大釗が入信した事実はない。

一九一四年五月十日 『甲寅』雑誌が東京で創刊される

『甲寅』雑誌は秋桐（章士釗）が主編。章士釗（一八八一～一九七三）は第二次革命失敗後、一九〇四年に日本に渡り、袁世凱批判を続けた。章士釗にとつて一九〇五年～一九〇七年に続く二度目の訪日だった。『甲寅』雑誌を舞台に活発な言論活動を行った。²⁰ 陳独秀（一八七九～一九四二）は章士釗の招聘を受け、一九〇七年七月に東京に赴き、『甲寅』雑誌に参画した。東京ではアテネ・フランセに通い、フランス語を学んだ。陳独秀にとっては五回目（最後）の訪日となる。一九一五年六月まで日本に滞在した。²¹ 独秀というペンネームもこの『甲寅』雑誌上で初めて使われたものである。陳独秀と李大釗は『甲寅』雑誌での言論活動を通じて親交を深めたとみられる。

章士釗の回想によれば「一九一四年に私が日本の東京で甲寅を創刊し、文章によって天下の賢人豪傑と交流を図ろうとしていた時に、突然郵便で一步の論文が送られてきたので、²² 読んでみると、その上品で含蓄のあることに驚き、その精神は歐陽脩のようであった。その自署を見るとはつきりと李守常と書いてあった。私はその人を知らず友人の中にも知る者がなかったので、やむを得ず丁寧な返事を書き、来てもらうことにした。はたして翌日守常がやってきて、小石林町の小さな部屋で私たち二人の友情は、士「知識人」が互いにまみえるという礼節をもって始まり、守常が北京で命を落とす時まで十四年間にわたり間断なく続いた。」²⁴ とある。李大釗からすれば、東京で章士釗と知り合うことよつて、それまでの北洋法政学堂の狭い人間関係から拡大し、革命党人を含む知識人の世界へと目をひらかせることになったといえる。²⁵

一九一四年九月八日 早稲田大学政治経済学科に入学

早稲田大学にはかつて清国留学生部が存在したが、李大釗が留学したのは政治経済学科（今日の政治経済学部）の正規の学生として、清国留学生部ではない。早稲田大学清国留学生部は一九〇五年九月、青柳篤恒を主事として設置された。大隈重信の東西文明調和論の考えに端を発したものであるが、戊戌政変以降、清国において日本留学ブー

ムが起こり、早稲田大学の前身東京専門学校にも多くの清国留学生がやってきた。例えば、唐宝鏢（政治家、法律家）は青柳篤恒や永井柳太郎の同期である。より簡便に清国留学生を受け入れ、質の高い教育を提供する目的で、清国留学生部が設置された。一八二名の卒業生を輩出し、一九〇八年に幕を閉じている。⁽²⁶⁾卒業生には、葛祖蘭（日本語学）、杜国庠（哲学）もいる。宋教仁（政治家）、黄尊三（教育学者）も清国留学生部の門をたたいている。

北洋法政専門学校卒業が早稲田大学の入学資格を満たすものとして認定された結果、李大釗は無試験入学を許可された。九月が入学、新学期開始の時期である（日本の学制では、一九二二年四月から四月はじまりに変更）。学籍簿によると李大釗の生年月日は、光緒十七年（一八九一年）十月六日となっている。李大釗の生年月日は光緒十五年（一八八九年）十月六日であるので、二年若く記入していることになる。入学当時、李大釗はすでに満二十四歳であったので、日本の大学生の年齢に配慮したものと推測される。

袁世凱政権との対決

一九一四年十一月十日 李大釗は「国情」、『甲寅』雑誌第一巻第四号）を發表し、グッドナウ（Frank Johnson Goodnow 一八五九〜一九三九）と有賀長雄（一八六〇〜一九二二）を名指しで批判した。有賀長雄は青柳篤恒とともに袁世凱の顧問として一九一三年二月にはじめて北京に招かれ（有賀長雄は一九一三年〜一九一九年の間、断続的に中国での仕事に携わった）、アメリカのコロンビア大学教授グッドナウと協力して袁世凱の帝制復活のための協力をした。グッドナウと有賀長雄は憲法と国情の合致、つまり欧米諸国や日本とは異なった中国の特殊性を強調し、憲法の導入は時期早々であり、帝制こそが中国の実情に合致していると主張した。⁽²⁸⁾

二十一カ条要求への対応

一九一五年一月十八日に大隈重信内閣は対華二十一カ条要求を袁世凱政府に提示した。交渉の内幕がマスコミに

よって報じられると、日中両国の世論が沸騰した。⁽²⁹⁾ 在日中国人留学生も抗議活動を行った。最終的には、五月七日に日本政府は対華二十一カ条要求の最後通牒を突き付け（五月七日は国恥記念日となる）、五月九日に袁世凱政府が受諾したことによって幕を閉じた。この間、李大釗は東京におり、これらの抗議活動に積極的に参加したとされる。中国人留学生の活動でいえば、集会、ピラ等で宣伝活動が行われたため史料が少なく、実態の解明は難しい。李大釗が直接関係したものを以下に挙げる。

二月十一日 北神保町の中華基督教青年会館に二千人あまりの留学生が集まって抗議集会を開くが、日本の警察に鎮圧された。その前後に、留日学生総会が結成される。李大釗も参加する。

二月十一日の直後 「警告全国父老書」「全国の父老に警告するの書」（一九一五年）を発表した

「警告全国父老書」は留日学生総会が発行したガリ版刷りのパンフレット。当時リークされた中国政府に対する二十一カ条要求の内容を紹介している。東京の靖国神社の遊就館を参観し、日本における清国からの戦利品の展示を見て悲嘆にくれた。中国では上下朝野ともに国恥仇讐を忘れていたずらに内争にふけり、頹廢混迷に至った中国の人心を痛恨し、十年の臥薪嘗胆の精神によって恥辱を雪ぐことを訴えた。

四月 張潤之とともに今井嘉幸『中国国際法論』を翻訳する

今井嘉幸は一九一三年初めに日本帰国後、中国の領事裁判権についての研究をまとめ、博士論文「支那における外国裁判権と外国行政地域」を完成させ、今井嘉幸『支那国際法論』（一九一五年、丸善）を刊行した。李大釗によると今井嘉幸は帰国前、「中国は将来、必ず領事裁判権を撤去すべきだ。諸君は法学を研究し、それに備えなくてはならない。」⁽³⁰⁾ といったという。またこれに先立って『言治』第二期に今井嘉幸（黄旭訳）「論撤去領事裁判権」が掲載されている。

六月 「国民之新胆」「国民の臥薪嘗胆」を発表した

「国民之新胆」は二十一カ条要求の交渉経緯、二十一カ条要求と中国の将来、政府と国民に訴えるの三節に分け、

節ごとに順に、二十一カ条要求をめぐる日中間の交渉の経緯、二十一カ条要求による権利喪失とその内容、亡国の国民とならぬように自ら痛みを感じて奮起することを呼びかける日本の対中国政策を厳しく批判した内容となっている。吉野作造『日支交渉論』（警醒社書店、一九一五年）と真つ向から対立した主張となっている。後に『国恥記念録』（一九一五年六月）に収録された。

六月五日～十五日 第一学年必修の十一科目の試験を受ける

早稲田大学政治経済学科で履修した科目と第一学年の成績が大正四年度進級成績表として早稲田大学に保存されている。第二学年以降の成績表はない。

この成績表から読み取れる李大釗の成績は以下の通りである。

浮田和民教授・国家学原理・七七点（政治学）、美濃部達吉教授・帝国憲法・七五点（政治学）、天野為之教授・応用経済学・八五点（経済学）、塩沢昌貞教授・経済学原理（ヘーリー著、アウトライン）・オブ・エコノミックス・六五点（財政学）、浮田和民教授・近代政治史・七〇点（史学）、牧野菊之助教授・民法要論・六〇点（法学）、井上忻治教授・刑法要論・五五点（法学）、吉田巳之助講師・ポリティカルクラシックス・四〇点（原書研究）、伊藤重治郎教授・エコノミカルクラシックス・八七点（原書研究）、宮井安吉教授・英文練習・六六点（原書研究）、牧野謙次郎教授・論文・五六点（日本語作文）

総計七三六点、平均六六・九〇、評価は丙、席次は四〇番（百六人中）。

百六人中、不合格六名、科目不足で追試者が三七名いた。日本に到着して一年足らずで、早稲田大学に正規の学生として入学し、授業を聴講したことを考えると比較的良好な成績であるといえる。北洋法政学堂での勉強の成果であると言えるかもしれない。一九一五年九月から、第二学年が始まり、有賀長雄の国法学、永井柳太郎の社会政策、浮田和民の原書研究等が開講されている。李大釗も傍聴した可能性はある。

安部磯雄との関係

李大釗と安部磯雄との関係についてはこれまで研究者から重視されている。安部磯雄が一九〇一年に日本ではじめての社会主義政党である社会民主党を創立した（明治政府により直後に禁止される）ことによるものであろう。李大釗を直接知る清水安三は「早稲田大学に三年居つて、社会学を安部磯雄に就て勉強した。その間に彼は社会主義者たらざるを得ないと考えた。」と述べたが、事実とは異なる。第一学年の成績表を見る限り、安部磯雄の授業が載っていないので、受講の事実はない。しかし、李大釗は清水安三に対して「東京で安部磯雄と接し、感化を受けました。大山郁夫からはそれほど影響を受けませんでした。」と語っている。安部磯雄は自由選択科目の「都市問題」と「社会政策」を担当していたので、李大釗が傍聴した可能性はある。むしろ基督教青年会での活動を通じて、安部磯雄と密接な接点があったとみられる。安部磯雄は基督教青年会の寄宿舎の管理業務に携わっていたからである。ここで名前の挙がっている大山郁夫（一八八〇〜一九五五）に対して李大釗は学問的な興味を持っていたとみられる。第一学年の国法学原理はほんらい大山郁夫の担当であったが、この年に限っては有賀長雄が担当していた（単位は未取得で、李大釗が有賀長雄の授業を傍聴したかどうかは分からない）。有賀長雄が早稲田大学で授業を開講中だった時に、李大釗が有賀長雄を批判することになるのは奇遇といえよう。

八月十日 「厭世心与自覚心」——『甲寅』雑誌記者に答える」を『甲寅』雑誌第一巻第八号に発表する

李大釗「厭世心与自覚心」は、陳独秀「愛国心与自覚心」（『甲寅』雑誌第一巻第四号、一九一四年十一月）に対して書かれた論文である。陳独秀は、自覚心のないまま愛国心だけがあっても意味をなさないし、民を損なう禍において悪い国家は無国家よりひどいと述べた。厭世的な気分が漂うものであった。それに対し、李大釗は陳独秀と同じく絶望的な状況を承認しつつもいかに実践への契機をつかむかを問題とし、実践主体としての自覚心の意味を問い直している。『甲寅』雑誌記者とは章士釗のこと。章士釗には、陳独秀の議論をきっかけにして愛国心や自覚心について

誌上で議論を深めたいという意図があったとみられる。陳独秀はこの後、一九一五年九月十五日に『青年雑誌』（その後、『新青年』と改称）を上海で創刊した。

高一涵との関係

李大釗と高一涵は留日学生界の二大論客として知られていたとされるが、実際に互いに面識を得たのは一九一五年末か一九一六年に入ってからである。高一涵は後年（一九二七年）、次のように回想している。「陳独秀先生が上海で『新青年』雑誌を創刊したとき、私はすでに日本に三年余りいて、貧しさを極めいつも食事にも事欠いていた。独秀は私に投稿を呼びかけてくれ、私は月数十元の原稿料で糊口をふさいでいた。お金がなかったため外出せず、毎日部屋に閉じこもり読書をしていたため、私の名前を知る者はほとんどいなかった。守常「李大釗」は『新青年』を読み、私の文章を見て、私が東京にいることを知り、半年余り前に訪ねてきたが、結局会えなかった。たまたま「袁世凱の」帝制騒ぎが起こり、東京に留学生総会の組織が出来て、守常が留学生総会の中に私の名前があるのを見て、あれこれ尋ねて、はじめて私の住所を知った。ある日、家主が李大釗の名刺をもって二階に上がってきたが、私は名刺を見ても誰だか分からなかった。話しているうちに、はじめて守常が私を半年前に訪ねていたことを知った。これが私と守常との初めての出会いである。国事についてあれこれ語り合っているうちに、お互いに意気投合し、親しく付き合うことになった。」⁽³³⁾

一九一六年一月 留日学生総会が正式に結成される

一九一六年一月三十日 神州学会が東京で成立する

反袁闘争を目的に秘密裏に東京で組織され、李大釗も参加した。⁽³⁴⁾

一月末 横浜から上海へ船で赴く

護国戦争、袁世凱に反対する第三革命を担う人々との連絡をとる。

二月二日 早稲田大学を除籍になる

学籍簿によれば、除籍の理由は「長期欠席」。おそらく一九一五年九月に始まる第二学年は諸活動に忙しく授業には出ていなかったであろう。早稲田大学には李大釗による学費納入票が残されている。この学費納入票から納付が確認できるのは第一学年の学費のみで、第二学年の学費について状況は不明である。³⁵⁾

二月 日本に戻る

転居し、東京郊外の高田村の月印精舎に滞在し、³⁶⁾中国留日学生総会の会務に専心する。李大釗によると上海から東京に戻り、「貴君〔沈漢卿〕や数人の友人たちと高田村の月印精舎に居を構えた。屋外には雑草が生い茂っていた。……精舎の裏に古廟があり、築山の上に建てられていた。築山の前には池があり、池のほとりには梅や桜の花が植わっており、軒先からはあたり一面花であった。³⁷⁾」

春 「民彝与政治」「青春」などの論文を執筆する

留日学生総会機関誌『民彝』が東京で創刊され（一九一六年五月十五日）、李大釗の「民彝与政治」が掲載された。この「民彝与政治」では、これまでの李大釗の政治実践の経験を経て、自己を一人の「匹夫」として抵抗の主体たる人民のなかに見出そうとした。この抵抗の主体を「民彝」としてとらえ、いかにしてこの民彝のはたらきを回復できるかを追求している。中国の古典の引用の多い非常に難解な論文である。同時にJ・S・ミルの『代議政府論』をまとめた形ではじめて紹介したものと名高い。同時にダイシー（A. V. Dicey）やヘッジズ（Hedges）など

時、最先端の政治学者の議論も紹介している点が注目される。またベンサムへの言及も的確である。そのため安藤彦太郎は「李大釗が当時発表した論文は博引傍証。J・S・ミルやJ・ベンサムをはじめ欧米の古典などを引用し、絢爛たるものがある。講義の際に提示された原書をいちいち図書館でたしかめたものと思われ、その点では早稲田の講義を十分活用した、といつてよいだろう。」⁽³⁸⁾と評価した。ただし安藤彦太郎のいう「講義の際に提示された原書をいちいち図書館でたしかめた」に対しては私は異議がある。李大釗が日本に留学していた時期（から今日までの）日本における政治学や経済学などの社会科学は欧米理論の「翻訳学問」の最たるものであり、教室や学界においては欧米の「最新学説」をあれこれ並べて品評したり、それらをパッチワーク風につないで紹介していくやり方が多かった⁽³⁹⁾。李大釗の論文が西洋文献の「博引傍証」風に見えるのは、李大釗の論説の背後にある日本の学問や研究の作法がそのようにさせたのであると私は指摘したい。

『新青年』第二巻第一号（一九一六年九月一日）に李大釗「青春」が掲載された。青年の奮起を呼びかける『新青年』の発刊趣旨に沿った名文であり、李大釗の代表作の一つである。執筆にあたっては親しい陳独秀から投稿の勧めがあったことが推測される。「青春」はその前半部を茅原華山の文明論に、その後半部を竹越与三郎の青春論に全面的に依拠している。李大釗の「青春」でも欧米の諸学説の博覧引用が顕著な特色であるが、これも茅原華山や竹越与三郎の文体に由来するものであることを指摘できる。⁽⁴⁰⁾

五月 中国に帰国した

李大釗の日本語力

一九一九年以降北京に住み、李大釗と親しく付き合った清水安三の回想によれば、「李大釗としゃべる時はいつも日本語で、魯迅みたいな達者な日本語ではありませんが、まあわからない日本語ではありませんでした。」⁽⁴¹⁾とある。

日本から持ち帰った書籍

明治三十六年（一九〇三年）から大正十一年（一九二二年）にかけての『太陽』雑誌をはじめとして、大量の日本語雑誌が李大釗によって北京大学図書館に寄贈され（『北京大学日刊』一九二〇年六月二十日号の記事）、保存されている。⁽⁴²⁾ 『太陽』雑誌は一八九五年から一九二八年まで博文館より発行され、当時の日本を代表する総合雑誌である。

李大釗は日本で何を待たのか

李大釗については、マルクス主義者となったことを到達点にした単線的な思想発展を描くことになりがちである。例えば、高一涵の以下のような回想がある。「一九一八年に守常『李大釗』はマルクス主義者になった。早くも東京に留学していた時に、彼はマルクス主義学説に接触していた。当時、日本の東京帝国大学の経済学教授河上肇博士はすでにマルクスの『資本論』を日本語に翻訳していて、河上肇博士本人もマルクス主義学説を紹介していた。守常はマルクス主義に接触したのは、まさしく河上肇博士の著作を通してであった。⁽⁴³⁾ この回想からは事実関係の誤りが散見される以外に、李大釗が早期にマルクス主義者となったことを顕彰したいという高一涵の意図が感じられる。李大釗が日本で親しく接した安部磯雄はキリスト教的人道主義の立場から社会改良を説くという意味での社会主義者ではあったが、唯物論的な社会主義者ではなかった。日本にマルクス主義を紹介した河上肇は『貧乏物語』を著した一九一八年の時点ですらマルクス主義者であったとはいえない。⁽⁴⁴⁾（そのため河上肇の『貧乏物語』はマルクス主義や唯物論に対する理解が不徹底であるとして批判された）。河上肇がマルクス主義に傾斜するのはその後である。

日本で知り合った章士釗、陳独秀、高一涵との交遊は李大釗がその後中国の言論界で活躍するきっかけになった。李大釗の日本での言論活動は『甲寅』雑誌や留日学生総会が主である。李大釗は『甲寅』雑誌（その後、『甲寅』雑誌の執筆陣が『新青年』の母体となったとされる）で事実上の言論界デビューをした。『甲寅』雑誌に掲載された李大釗の論文には日本で得た学術情報があちこちに見られる。李大釗は中国帰国後、精力的に第一次世界大戦中の欧州事情を紹介している。その際、北京大学に寄贈した『太陽』など日本の雑誌を参照していた。李大釗の言論活動の根

底には日本での学問があったことは間違いない。李大釗の日本留学の意義はまさにそこにあつたのである。

注

- (1) 「ほぼ同じ研究文献」とは、以下の三点の研究を念頭においている。森正夫『李大釗』新人物往来社、一九六七年。富田昇「李大釗 日本留学時代の事績と背景——留学生として」、『集刊東洋学』第四二号、一九七九年。安藤彦太郎「日本留学時代の李大釗」同『未来にかける橋——早稲田大学と中国』成文堂、二〇〇二年。本稿ではこの三点の研究によって発掘された事実を大いに利用させていただく。煩雑なので、以下、いちいち注記しない。
- (2) 朱文通主編『李大釗年譜長編』中国社会科学出版社、二〇〇九年。楊琥主編『李大釗年譜』雲南教育出版社、二〇二一年。
- (3) 『李大釗全集』第四卷、人民出版社、二〇一三年、四九七頁。
- (4) 清水安三『支那当代新人物』大阪屋号書店、一九二四年、二一五頁。
- (5) 『法学通論』批注』、『刑法講義』批注』として『李大釗全集』第一卷、河北教育出版社、一九九九年に収録されている。
- (6) 武藤秀太郎「第五章 今井嘉幸と李大釗」同『大正デモクラットの精神史』慶應義塾大学出版会、二〇二〇年、一六九頁。
- (7) 中島端「支那分割の運命」（一九二二年）は、それに続く酒巻貞一郎『支那分割論』（啓成社、一九一三年七月）、内藤湖南『支那論』（文会堂書店、一九一四年三月）が研究者によって取り上げられるのに比して、ほとんど忘れ去られていると言ってもよい。中島端は中島敦の伯父にあたる。『中国分割の運命』駁議』については後藤延子「中島端『支那分割の運命』とその周辺——「アジア主義者の選択」（二）（二）『人文科学論集 人間情報学科学編』第三九号・第四〇号、信州大学人文学部、二〇〇五年・二〇〇六年に詳しい。
- (8) 「托爾斯泰主義之綱領」『李大釗全集』第一卷、河北教育出版社、一九九九年、五五九頁。
- (9) 入野野良行「李大釗と「トルストイズム」——李大釗研究ノート・その二」『駿台史学』第四六号、一九七九年、一九頁。
- (10) 李大釗「民彝与政治」『李大釗全集』第一卷、人民出版社、二〇一三年、二八七頁。
- (11) 後藤延子「李大釗と中国社会党——加入か否かをめぐって」『人文科学論集 人間情報学科学編』三二号、信州大学、一九九七年、一一九頁。

- (12) 郁巍「李龜年遊学日本序」、北京大学図書館・北京李大釗研究会編『李大釗史事綜録』北京大学出版社、一九八九年、五二頁。
- (13) 「湯佩松先生訪問記」一九八七年八月、北京大学図書館・北京李大釗研究会編『李大釗史事綜録』北京大学出版社、一九八九年、九八頁。
- (14) 李大釗『自然律与衡平律』識（一九一三年十一月一日）（『李大釗全集』第一卷、人民出版社、二〇一三年、一五四頁）にも日本留学の同行者としてこの二名に言及がある。
- (15) さねとうけいしゅう『中国人日本留学史』くろしお出版、一九六〇年、二〇一〜二〇二頁。
- (16) 朱文通主編『李大釗年譜長編』中国社会科学出版社、二〇〇九年、一六〇頁。
- (17) 向谷容堂「ベニンホフ博士と早稲田奉仕園」（『新鐘』第四号、一九六四年）。向谷容堂は奉仕園第二代総主事（初代はベニンホフ）。
- (18) 小出正吾「友愛から信愛へ——信愛学会開設事情」『追悼・向谷容堂』一九六九年。
- (19) M・メイスマー（丸山松幸・上野恵司訳）『中国マルクス主義の源流——李大釗の思想と生涯』平凡社、一九七一年、三五五頁、三五八頁。
- (20) 森川裕貫によれば、『甲寅』雑誌は、多彩な人材を糾合し、論壇よりも考察を、主張よりも検討を重視し、特定の党派に偏らない幅広い意見を集めて議論を戦わせる「公共輿論機関」を標榜していたという。森川裕貫『政論家の矜持——中華民国時期における章士釗と張東蓀の政治思想』勁草書房、二〇一五年、八〇頁。
- (21) 長堀祐造「陳独秀——反骨の志士、近代中国の先導者」山川出版社、二〇一五年、二四頁。
- (22) この論文は『甲寅』雑誌第一巻第三号（一九一四年八月十日）に掲載された李大釗「風俗」であると推定される。
- (23) 小石林町は章士釗の誤記で正確には小石川林町である。小石川林町三十番地「今日の住所表記では東京都文京区千石」に『甲寅』雑誌社の編集部があった。訪日後、章士釗は黄興に親しく接し、東京での住居は黄興の斡旋で黄興の住居裏手の一室（家賃は月十八円）に住んでいた（毛注青編著『黄興年譜長編』中華書局、一九九一年、四一三〜四一四頁）。黄興の住居は前田九二四郎の紹介で芝区高輪南町五三番地「今日のJ R品川駅前のウイング高輪WESTの横から高輪台方面に坂を二百メートルほど登った突き当り近辺」にあった。

- (24) 章士釗『李大釗先生伝』序(一九五二年八月)『章士釗全集』八、文匯出版社、二〇〇〇年、八二頁。原載は張次溪『李大釗先生伝』北京宣文書店、一九五一年。
- (25) 朱成甲『李大釗早期思想与近代中国』人民出版社、一九九九年、五九頁。
- (26) 早稲田大学清国留学生部については『早稲田大学百年史』(早稲田大学出版部、一九九七年完結)の記述を参考にできる。
- (27) 『早稲田大学百年史』は全文がウェブ上に公開されている。
- (27) 学籍簿には「貳種資格 三・九 無試験詮之上大政一年ニ編入」「二種資格 三月九日 無試験選考の上、大学政治経済学科に編入」とある。
- (28) 袁世凱政権下の中国の政局は目まぐるしく移り変わり、グッドナウの見解も一定ではなく(山田辰雄「袁世凱帝制論再考」同編『歴史の中の現代中国』勁草書房、一九九六年、一七八頁)、また有賀長雄とグッドナウの間の見解の相違もしばしば発生した(曾田三郎「第八章 中華民国憲法案の起草と外国人顧問」同『立憲国家中国への始動——明治憲法と近代中国』思文閣出版、二〇〇九年、三〇三頁)。
- (29) 二十一カ条要求をめぐっては、日中関係の悪化に与えた決定的な影響は顕著であるが、日本、中国の内政、外交ともに一次史料の不足により実態の究明が困難である(奈良岡聰智「対華二十一カ条要求とは何だったのか——第一次世界大戦と日中対立の原点」名古屋大学出版会、二〇一五年)。また日中両国の国内外の世論の動向が政策決定に与えた影響も大きかった。
- (30) 李大釗『中国国際法論』訳叙『李大釗全集』第二卷、河北教育出版社、一九九九年、三頁。
- (31) 清水安三『支那当代新人物』大阪屋号書店、一九二四年、二一五頁。
- (32) 森正夫『李大釗』新人物往来社、一九六七年、一〇〇頁。
- (33) 高一涵『李大釗同志略伝』『中央副刊』第六〇号、一九二七年五月二三日。
- (34) 高一涵『回憶五四時期的李大釗同志』『回憶李大釗』人民出版社、一九八〇年、一六四頁。
- (35) 早稲田大学に現存する李大釗関係の史料としては、学籍簿、成績表、学費納入票の三点があり、すでに研究者によって紹介、活用されている。本稿での写真掲載も考えたが、技術的な理由から今回は見送った。
- (36) 月印精舎について詳細は不明である。高田村は、今日の地名では東京都豊島区雑司が谷と高田のほぼ全域、西池袋二丁目、南池袋二・三・四丁目、目白一・二・三丁目の大半に相当する。武蔵野台地上にあり、雑司ヶ谷台、高田台などの高台があ

る。今日のJR高田馬場駅周辺一帯とは若干ずれがある。早稲田大学や旧居の中華基督教青年会宿舎から近く、中国留日学生総会の会務にあたって不便はなかったとみられる。

(37) 李大釗『哭沈漢卿君』『李大釗全集』第二巻、人民出版社、二〇一三年、四八八頁。

(38) 安藤彦太郎『早稲田大学と中国研究』同『未来にかける橋——早稲田大学と中国』成文社、二〇〇二年、四一頁。

(39) 今野元は「日本には、特定の対象に限定して実証的に調査するスペシャリストよりも、海外文献を幅広く渉獵して国内に輸入するジェネラリストを好む「政治学・学」の伝統がある。「優秀」な研究者とは、先行研究を器用に紹介する「学界展望」の名人である」と述べる。李大釗と同時代の吉野作造も含め、今日まで続く日本における翻訳学問としての政治学研究に対して辛辣に言及している。今野元「東京大学法学部のドイツ政治史研究——批判的回顧と建設的提言(一)」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』第十七号、二〇一六年、二〇七頁。

(40) 川尻文彦「李大釗の「青春」について」『愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)』第五三号、二〇二一年。

(41) 清水安三「李大釗先生の思い出」『石ころの生涯 桜美林大学創立者清水安三遺稿集』桜美林学園、一九七七年、二〇七頁。原載は『復活の丘』一九八一年三月一日号。

(42) 後藤延子「李大釗と日本文化——河上肇・大正期の雑誌」『信州大学人文学部特定研究報告書』一九九〇年三月。後藤延子は李大釗の寄贈とみられる北京大学図書館所蔵の日本語の雑誌を調査し、解題を付した。

(43) 高一涵「回憶五四时期的李大釗同志」『回憶李大釗』人民出版社、一九八〇年、一六五頁。事実関係の誤りとしては、一、李大釗がマルクス主義を受容したのは中国に帰国後であり、一九一八年頃に各種マルクス主義文献を収集し、「私のマルクス主義観」(一九一九年)がその成果であるとされる。二、河上肇は東京帝国大学教授ではなく京都帝国大学教授である。また当時河上肇はまだ『資本論』の翻訳は手がけていない。三、『資本論』の日本語訳(部分訳)は一九二〇年の高島素之によるものが嚆矢とされる。

(44) 河上肇の独特なマルクス主義理解を三田剛史は「道学的マルクス主義」と名づけた(同『甦る河上肇——近代中国の知の源泉』藤原書店、二〇〇三年)。